

アラビアの話 その4

前回話したラマダーンは全世界のイスラム教徒（ムスリム）が義務付けられている行いで夜明けから日没までの間、飢えで苦しむ同胞を思い、自ら体験する事でアッラーの神の慈愛を考える一ヶ月間と言われています。病人・子供・妊婦・旅行者・兵士はその義務を一時免除されるが、子供以外は別の時期（病気が治った時や出産後）に同じ期間断食をする事になっています。会社の勤務時間も三交代を除き通常勤務は8時間から6時間に少なくなるが、実際にはアラビア人達は午前中2～3時間働くだけで、他はインド・フィリピン・日本など異教徒の出稼ぎ労働者がカバーする事になり、決済が著しく停滞し仕事が進まなくなります。

サウディアラビアの人口は、統計がはっきりしませんが、約2000万人と言われその内1400万人が昔からいるアラビア人、長期滞在外国人が600万人（ちなみに当方が初めて赴任した77年頃は800万人の内、200万人以上が外国人労働者と言われていた）となっています。オイルマネーで潤ったサウディ国王が文字通り湯水の如く金を使い、キツイ・キタナイ・キケンの3k職場に外人労働者を雇った結果です（当方もその一人ですが）。税金はイスラムの定めるザカットと呼ぶ0.1～0.4%程度、医療・教育は原則只、基礎食料（麦・米・砂糖・食油・紅茶など）やガソリン（25年前18円/L、現在27円/L）には補助を出し、価格を安く抑えるなどしてオイルマネー分配の不平等さから来る国民の不満をなだめようとしています。この所サウディ国内の反政府活動はエスカレートする一方で、11月3日にもムスリムの聖地マッカでテロリストと銃撃戦があり多数の武器が発見されたと報じられています。ブッシュは米軍を8月にカタールに移した後も軍事顧問団を残し、現在の王制が転覆されないよう気配りをしています。無茶な乱費をする数千人の王族がいるので、中々国民の怒りを抑え切れないでいるようです。

日本は金正日や中国の反日感情に振り回され、石油は金さえ出せば何処からでも入ってくると思っている人が多く、西アジアで一朝事有りサウディ王制が転覆するような事態を考えていないように思われます。中国は着々この地域に手を打ち、自国の商品や労働力と引き換えに石油の確保に励んでいます。日本でこのような事実を知っている人が少ないのは残念です。中国には5年程赴任していましたが彼等の徹底的な反日教育は過去50年以上続き、戦後賠償としてノウハウ・特許を只同然で手に入れ、模倣し、逆輸出して稼ぎ、シベリアの油ガス設備も金は日本に出させるべくロシアと画策中で、イラクでもスーダンでも中国人を送り込み着々と実績を上げています。日本企業が再構築（リストラ）と称して中国に投資し製造工場を移しましたが、反日教育で凝り固まった連中が一旦暴れだしたら（良い例が数日前西安で馬鹿な日本人学生をダシにして起こりました）、利益を回収するどころかすべて只で没収される可能性が高いのです。西アジアの石油を13億人の中国に分捕られないよう、今から対中政策を見直す必要があります。 アラビアの話 完

